

進路たより

最終号

私立校から始まった高校受験が、10日の公立高校受験の無事終了とともに終わりました。悪天候で、前の晩から雪が降り積もり、ひやひやものでしたが、志願者全員が無事、希望する受験校にて受験をすることができました。保護者の方も、ご心労があったことでしょう。本当にご苦労さまでした。合格発表がまだ残っていますが、受験後に登校してきた生徒一人一人の顔を見ると、みんな力を出し切ってきたという顔が多くて安心しました。結果はどうあれ、力を出し切ったと思えること、「やったー、終わったー。」と思えることが、けじめをつける上では大切なことだと思います。

17日の公立高校合格発表の時の連絡の流れや、それ以後の事務処理については、別紙プリントを作成しましたので、そちらの方で確認してください。とにかく、これまでの進路事務へのご協力、本当にありがとうございました。

地図を持って

昔は、公立高校の合格発表、そして卒業式という順で日程が組まれていましたので、公立高校受験が終了してから、卒業式まで少々日数がありました。でも、今は、卒業式を行って、その後に合格発表となっていますので、受験が終わると、3日ぐらいで卒業式です。なんだか、3年生にとって思い出に浸ることなく、慌ただしい時間を送ることになります。

さっそく、昨日から卒業式練習が始まりました。生徒はもちろんのこと、式の流れや儀礼を指導する私たちの方も、昨年のことや、長年M中に勤務なされている先輩の先生方から教えてもらいながら、生徒に指導している状況です。

入場や退場など、まだまだごちありませんが、当日は、きっと胸を張って堂々と歩んでくれるでしょう。

さて、思いのままを徒然に書いてきた、この“進路だより”もこの号で最後となりました。字が多くて、読みにくかったり、伝えたいことがうまく言葉となって表現できなかったりと、ご迷惑だったかもしれません。ただ、このたよりを発行している間に、数多くの保護者の方々から、返信のメッセージやメールをいただくこと、何よりも最高のプレゼントでした。飽きずに読んでいただきありがとうございました。

進路だよりとしての最後、どんなことを書きましょうか？

生徒たちに、受験終了後書いてもらったアンケートがあります。面接でいったい何を質問されたのか、どんな雰囲気だったのかということのアンケートです。これを書いてもらって、来年の受験生となる後輩たちに役立ててもらおうと思っているものですが、それを読み返していると、質問で一番多いのは「どうして、本校を受験したのですか？」「将来どんな方向に進みたいのですか？」というものでした。

県が事前に述べていたように、受験生の将来希望するキャリアについて尋ねるという方針そのままに面接でも問われているのだなあと思えます。

キャリアは、人が生きていく中で雪が降り積もるように、しんと積み重なっていくようなものです。受験生ひとりひとりにも15年のキャリアが積みあがって現在に至ります。振り返ると、辛い思い出や、苦しい出来事の積み重ねもあるでしょう。きっと忘れることなんてできないでしょう。その分、未来のキャリアは、希望にあふれているものであってほしいです。

3年生全員が、面接で答えたようなキャリアを積み上げることを希望します。

米良美一（めら よしかず）さんというは、カウンターテナーとして知られている歌手がいます。『もののけ姫』のテーマ曲を歌った人という思い出す人もいるでしょう。米良さんは先天性骨形成不全症を患っていたため、幼いころから骨折をおよそ60回以上繰り返していたそうです。今もこの病気のため、身長が伸びず、両腕も伸ばせないため、手を重ねて歌っています。

米良さんは、地元宮崎県のふるさとにはほとんど帰郷していないんだそうです。なぜかという、いじめとか体験して、あまりにも悲しい出来事ばかりが多くて、できれば、自分のキャリアの中から、あの時代だけを消し去りたいと考えていました。

最近、そんな米良さんが、勇気を出して故郷宮崎に帰り、自分の育って小学校を訪ねるという旅番組への出演を了承しました。

小学校の校門からスタートするその映像は、校門に一步踏み出すことさえ、勇気を振り絞る米良さんの場面が映し出されます。

学校からは、当時の先生がたが迎えてくれました。いつも一緒にそばにいてくれた寮母さん。音楽の才能を見つけてくれた先生。どのかたも、熱いハートの持ち主ばかりです。

自分は、この時代のことを捨てたいと思って、これまでこの地を避けていましたと、正直に米良さんが語ります。

すると、寮母さんが

「みんな少なからず、そういう思い出はあるものだよ。だからみんなで、米良君が戻ってきたいって言うまで待とうって話をしていたんだよ。」ってあつたかく語りました。なんだか、辛く苦しい思い出のはずの、このキャリアが、米良さんの中でちょっと変わったのかもしれませんが。

校庭には、その時代の仲間たちが集まっていました。米良さんのいじめの記憶は深い。きっとこの中にもいじめた人はいるはずです。

米良さんが、なんとなく言いずらそうに、「僕はある日、銀杏の葉の中に埋められたんだ」って語りました。いやいやながら、みんなにいじめられている米良さんの姿が思い出されます。

すると、ひとりの女性の方が手を挙げます。「それ、わたしやったよ」って。米良さんもちょっと啞然。「でも、その後、米良君、私のこと、銀杏の葉の中に埋めたじゃない。」と。

みんなで、埋めあって遊んでいた記憶が、米良さんの中には、すっぱり消えてなくなっていたのでした。数人の小学生がわいわい言いながら、とっかえひっかえ、銀杏の中に埋めっこしていたのどかな風景が浮かびます。

この旅番組を通して、米良さんの記憶は、書き変わったことがあったといいます。

変わらないはずの記憶。自分がそう思っていた記憶は、実は何か重要なことを見失って、さまよい、まったく違う記憶になっていることもあるのだなあと思いました。

M中というキャリアが、卒業生にとって、どんな記憶になったのかは定かではありません。でも、消し去りたいという記憶であったとしたら、その記憶とちゃんと向き合おうと、ちょっと違う見方となるかもしれません。

降り積もる記憶の中で、自分がしたこと、されたことを、友人と語りあいながら、当時の記憶が光り輝く、そんな日々が始まります。それが卒業なのでしょう。

卒業おめでとう。